
アイドルは男の娘！？

橋本スバル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドルは男の娘！？

【Nコード】

N4136P

【作者名】

橋本スバル

【あらすじ】

女顔がコンプレックスな青年芹沢梓。ある日適当に外を歩いていたら、偶然アイドルのオーディションを受けることになってしまった。しかも競争倍率が200倍を超すそのオーディションに通ってしまつて……………。

美少女な青年（前書き）

始めまして、橋本スバルです。不定期更新ですが、よろしくおねがいします。

美少女な青年

「はあ」

鏡を前にして俺、芹沢梓せりやんざわは深いため息を吐く。
何年前からだろう？

朝起きて鏡を見ながら溜息を吐くのが習慣になったのは。
確か、小学校高学年の時だったと思う。
クラスで顔のことをバカにされて、それから鏡を見るのが嫌になった。

見るのが嫌なら見なければいいじゃないかって？
考えてみる。

鏡を見ないで生活なんてできるか？

少なくとも、俺は絶対に出来ない。

顔を洗う時だって、歯を磨く時だって鏡は必要だ。

もし鏡無しで生活出来る奴がいたら教えてくれ。

俺が土下座してでも教えを請いに行くだろうよ。

まあ、これで分かったと思うけど、俺は自分の顔にコンプレックスを持っている。

だけど、不細工トーナメントに出たら優勝する様な顔じゃない。

むしろそんなトーナメントに出たら1回戦敗退するだろう。

別に俺の顔は不細工な訳じゃない。

俺の顔はかなりの美少女なんだ。

もう1度鏡を見てみるけど、そこに映るのはどこからどう見ても美少女。

それも、そんじょそこのアイドルの比じゃない。

白い肌に、大きな目。

まつ毛も長くて、左目の斜め下には御丁寧に泣きぼくろがある。

ショートカットの髪型もこの上無いくらいに似合っていて、これで男なんて自分でも信じられない。

信じられないけど、16歳になっても胸は膨らまないし、第一俺の股の間には竿と2つの球がついてるんだから男なんだろう。

多分お袋の腹の中で何かが起きて、女として生まれてくるはずだったのに余計な物がくっついちまっただんだな。

ホントに迷惑な話した。

この顔のせいで今まで色々な目に遭って来た。

男に告白された事なんて星の数ほどあるし、やっと女子に告白されたと思ったら『私のお姉さまになってくださいって』言われるし、中年のおっさんには『キミ、モデルをやってみないか?』とか言われてもう散々だ。

やっぱり無駄に身長が高いのも関係してるのかもしれない。

今は高校2年生なのだが、身長は176?ある。

モデルの勧誘が多いのは多分このせいだろう。

「やっぱ成形した方がいいのかな?」

鏡を見つめながらポツンと呟く。

「何言ってるの?あんたまだキレイになりたいって言うの?」

「うわっ!姉貴、いつの間に!」

いきなり後ろから声をかけられて振り向くと、そこには姉貴こと芹沢里奈^{りな}が目を眠そうに擦りながら立っていた。

身長は俺より20?近く低いが、俺より5歳も年上で、どつかのアイドル事務所に努めている。

アイドル事務所と言っても姉貴がアイドルな訳じゃなくて、あくまでプロデューサーの役割だ。

姉貴も可愛い顔をしていると思うんだけど、本人いわく自分には裏方の方が合ってるらしい。

「まったく、そんなキレイな顔しておいてまだ足りないなんて、どうかしてるんじゃない?」

「別にキレイになりたい訳じゃねえって。一応俺も男なんだから、男らしくして欲しいと思っただけ」

「ふーん……その割には服も髪型も女物よね」

「これは仕方ねえだろ！」

俺だってこんな髪型や服は嫌だ。

だけど、お袋はスタイリストで親父は服屋の社長だ。

当然俺の髪はお袋が切るわけで、どれだけ言っても『似合う髪形にする』とか言ってもこの髪型にするのを止めてくれない。

親父も他のメーカーの服は着るなって言っておきながら女物の服しか送ってくれないんだ。

文句言っても『スカート送って無いだけでも感謝しろ』とか言い出すし。

とにかく俺の周りには誰も味方がいない。

学校でもいつもからかわれて、気の弱い奴だったら自殺してるね、多分。

「そうそう、あんた今日用事ある？」

いきなり姉貴に今日の予定を聞かれる。

「えーと……別に無いけど」

少し考えてから俺はそう答えた。

今日は日曜日だが、特にやることはない。

家でぶらぶらしてるつもりだったけど、何だろう？

「じゃあ、今すぐ出かけた方がいいわよ」

「なんで？」

「家で今日昼からやるアイドルのオーディションの打ち合わせをやるの。あんた見つかったら絶対メンドーなことになるでしょ？だから、午前中だけでも外にいる方がいいわ」

「なるほどね。分かった、じゃあ、飯食ったら適当にぶらぶらしてくるわ」

俺もいいかげんスカウトとかされるの嫌だからな。

だって、あの人たちとにかく鬱陶しいんだ。

どれだけ断つてもしつこく言ってきて、男だって言っても信じてくれない。

だったら『証拠を見せる』って言ってズボン降ろそうしたらそれ

さえ止めやがる。

人の性別を見かけで判断するなっと思っけど、普通は見かけで判断するから文句も言えない。

まあ、とにかく姉貴の会社の人がある前にさっさと飯食って外行か。

「さて、外行ってなにしようかねえ」

「あんたさあ」

「ん？なに？」

「ホント顔と声と言動一致しないわよね。顔はアイドル顔負けで、声も女役の声優になれるくらいいいのに、どうしてそんな喋り方なの？」

「放っとけ！」

しみじみと傷つくことを言う姉に大声でいう。

続けて『顔も声も変えられないんだからせめて喋り方くらい男らしくしようとしてるんだよ！』とか言いたかったけど、それはぐっと我慢する。

そんなこと言ったら間違いなくバカにされる。

バカにされることが分かっているのにわざわざ言う必要はない。

「ありや、そんなに怒るなっ」

「怒らせたのは姉貴だろうが！」

「はいはい。分かった分かった。それよりも、そんなゆっくりしていいの？会社の人もうそろそろ来るわよ」

「え……………うそお！？」

「ホント、（ピンポン）あ、ほら、チャイムなった」

「マジかよ」

こんなに早く来るなんて聞いてねえぞ。

まだ8時にもなっていないのに、早すぎだったの。

「ほら、見つかりたくなかったら行った行った」

姉貴は手をひらひら振ると、玄関へ歩いて行った。

パジャマ姿で行くのはどうかと思ったけど、今は人のことより自分

の事だ。

俺は急いで自分の部屋に戻ると着替えて裏口から出て行った。

美少女な青年（後書き）

誤字脱字等があれば教えてください。すぐに直します。

出会いは突然

「それにしても、やることないな」

商店街を1人で適当に歩きながら俺は呟いた。

日曜日はホントに暇だ。

とにかくやる事が無いんだよな。

普通の高校生なら日曜日は友達と遊びに行ったりするんだろうけど、あいにく俺にはそんな親しい友人はいない。

しかも今俺は姉貴との2人暮らしだから、家族で出かける事も無い。ちなみに言っておくが、両親がいない訳じゃないぞ。

俺は自分も合わせて7人家族で、姉3人と弟が1人いる。

姉貴が2年前から1人暮らしをしてて、俺も姉貴の家の近くの高校に通いたかったから住ませてもらってるんだ。

でも、今思えばこれが失敗だったと思う。

俺が通ってた中学には小学校からの付き合いの奴がいっぱいいて、親友もいた。

だけど、高校受験の時、何故か俺は皆とは違う高校を選んじまったんだ。

高校に入学早々顔のことをバカにされて、バカにしてきた奴と大喧嘩。

結局入学式の日には謹慎処分になって、友達の1人だってできなかった。

部活に入ればまだ良かったのかもしれないが、あいにく俺は小中と帰宅部を貫いてきた男だ。

今更やりたい部活なんて無い。

そりゃ最初の頃は少し寂しかったけど、今ではもうすっかり慣れた。適当にのんびりしたらだと過ごす事の素晴らしさに目覚めちゃったからな。

俺の生活に刺激なんていない。

平凡万歳だ。

「……………なんだか考えてて虚しくなってきたな……………本屋でも行くか」

俺はそう呟くと、本屋に向かった。

10分も歩くと本屋に着いた。

この図書館は結構規模が大きく、俺は暇な時よく利用している。

何となく本棚に並んだ本を眺めて、気になったタイトルの本を取ろうとした時だった。

「……………」

隣で何やら一生懸命背伸びをしている少女がいた。

見た感じ歳は俺と同じくらいで、可愛い顔をした長い髪の少女だ。

身長は160? ない位だと思うが、本棚の上の方を本を取ろうとしていて手が届いていない。

つま先立ちしてるせいで足がプルプルと震えていて、今にも倒れそうだ。

「う……………えいつ! えいつ!」

何気なく少女を眺めていると、背伸びでは手が届かないと分かったらしく、次はジャンプをしだした。

だけど、ジャンプをしてもあと少し届かない。

「あの、取りましようか?」

しばらく見てて、ちよつと可哀想になってきたので声をかけてみる。

「ふえ!?!」

すると、少女は声をかけられたことに驚いたのかその場でピョンと飛び跳ねた。

そんなに驚かなくてもいいと思うんだけど、知らない人に声かけられたらこんなもんだらうか?

「どれが取りたかったんですか?」

「え……………えつと、その……………い、一番上の緑の表紙の本です」

「ん、分かった。えつと、緑……………緑……………あった」

緑の表紙の本はすぐに見つかって、俺はその本を取り出す。

本のタイトルは『アイドルになる秘訣』だ。

「はい、これでいいですか？」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

少女に本を渡すと、少女は嬉しそうに笑ってお辞儀をしてきた。

「いえ、困った時はお互い様ですから」

俺もそう言っただけで笑いかける。

「あ、あの、もしよろしければ、お礼させてもらえませんか？」

「そんなのいいですよ」

「それでは私の気が収まりません」

少女の申し出を断ると、少女は笑顔から一転困った顔になる。

そんな顔されると悪い事したみたいないな気持になるじゃないか。

「やっぱり……駄目ですか？」

少女の眼には涙が溜まってきている。

……やっぱり男ってのはバカな生き物だよな。

可愛い娘が相手だと何でも言うとおりにしちまう。

「分かりました」

「本当ですか？ありがとうございます！ここではなんなので、近くに喫茶店がありましたからそこに行きましょう」

少女はさっき泣きかけてたのがウソみたいにはしゃぎ出す。

もしかして、さっきの演技だったんだろうか？

そんな風に思えてくるくらいの豹変ぶりだ。

でも、もしあれが演技だったとしても、これだけ喜んでくれるなら別にいいか。

本を取っただけで可愛い女の子と喫茶店に行けるんだ。

悪くはない。

そんな親父みたいなことを考えながら、俺は少女と一緒に近くの喫茶店に向かった。

変な喫茶店

喫茶店内に入ると、とりあえず見渡してみる。

内装は洒落た感じで、壁紙はピンク。

言うまでもなく客は全員女性で、居心地の悪い事この上ない。

まあ、皆俺のことを男だと思ってないだろうから、こんな居心地の悪さ感じる必要無いんだけどな。

「わあ、いいお店ですね。座りましょう」

少女ははしやぎながら俺の腕を引つ張る。

「うわっ、と」

俺はいきなり腕を引つ張られて一瞬転びそうになるが、何とか体制を立て直す。

そのまま引つ張られるままに店の中に入って行って、俺と少女は力ウンター席に座った。

「……………!？」

いや、ちよつと待て。

何かおかしなのが目に入ったんだが、俺の見間違い……………じゃ、ないよな？

どうして、どうしてこんな洒落た喫茶店にサングラスかけたハゲ頭のおっさんがいるんだ？

あまりにもこの店の雰囲気合ってないだろ。

「おや、お客様。ワタシの顔に何か付いていますか？」

「え、いや、別に……………」

しまった、知らない内におっさんの方をじっと見てしまった。だつて、仕方ないだろ？

壁紙ピンクで客も女性しかない店にサングラスかけたハゲ頭のおっさんってミスマッチすぎるじゃないか。

しかも今俺のことをお客様って言ったから、この人この喫茶店のマスターだろ。

「どんだけ趣味悪いんだよ。」

「では、注文がお決まりしいとお呼びください」

マスターはそう言ってお辞儀をすると、店の奥に消えていった。

「……………すごいマスターさんでしたね」

「はい、見た瞬間吹き出すかと思いましたよ」

マスターには悪いけど、多分初めてこの店に来た人皆驚くんじゃないか？

「好きな物頼んでくださいね。私が払いますから」

「いえ、そんなの悪いですよ」

「本を取ってもらったお礼ですから、遠慮しないでください」

「別に遠慮してる訳ではないですけど……………」

女性に払ってもらうのは男として気が引けるんだよな。

いくらお礼だからって、こういう時は男が払うのが筋ってもんだろ
う。

まあ、それ以前に少女は俺の事を男だとは思ってないだろうから、
早いとこ男だってこと伝えなきゃな。

「やっぱりこういうのは男が払うべきでしょう」

「えっ？男の人なんて、どこにいるんですか？」

「目の前にいるじゃないですか」

俺は人差し指で自分の顔を指しながら言う。

「そんな、冗談ですよ？えーっと……………」

少女は多分俺の名前を言おうとしたんだろうけど、まだ自己紹介を
してないから言えるはずもない。

「芹沢です」

「あ、ありがとうございます。芹沢さん、女の方ですよ？」

「いえ、だから、男です。ちなみに、オカマでもありませんよ」

俺がそう言つと、少女は驚いた表情で俺の身体を上から下までじつ
と見てくる。

まあ、当然の反応だな。

「でも、その服って女物の服ですよ？ブランドの」

「ブランドかどうかは知りませんが、父が服屋の社長をやっていますから送られてくるんですよ」

「……………そうなんですか。今まで気付かなくてすみませんでした」少女はそう言うのと申し訳なさそうに頭を下げてる。

「別にいいですよ。もう慣れてますし」

「いえ、本当にすみませんでした。遅れましたけど、私は桜内愛梨さくらい あいりです。よろしくお願いしますね」

「こちらこそ。俺は芹沢梓です」

「……………梓って、やっぱり女性じゃないですか？」

「だから違いますって！」

そりゃ梓なんて名前の男はそういないだろうけどさ。

両親が俺が生まれる前から決めてた名前なんだから仕方ないじゃないか。

先に3連続で女の子産んだからって、今度も女の子だろうとかいう意味不明な理由で名前を決めてて、結局生まれてきたのが俺だったらしい。

一応親父は名前新しく考えようって言うたらしいんだけど、お袋が譲らなかったんだと。

まあ、一応お袋も生まれる前から名前決めておくのは止めたみたいで、弟が生まれた時は普通の名前をつけたんだけど、その名前が『ゆきむら幸村』ってのはどうかと思う。

時代劇見てて歴史上の偉人の『真田幸村』にちなんだと言う話だ。

「お客さん。男の名前で梓ってのも、また一興ではありませんか」いつの間にか来てたマスターがいきなり言う。

「この店にカップルが来るのは珍しい。今日のお代、ただにしておきますよ」

マスターはそう言いながらジュースの入ったコップを1つだけ置くと、先が2つに分かれているストローを入れた。

「さあ、どうぞ。ごゆっくり」

マスターは俺と桜内さんに不適にほほ笑むと、店の奥へと戻って行

った。

俺と桜内さんはその後ろ姿をただただ見つめることしかできなかった。

変な喫茶店（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。

海まで逃げ

「私、実はアイドルになりたいんです」

マスターに出してもらったジュースを飲み終え、しばらく話していると、桜内さんがいきなりそんなことを言い出した。

「ああ、それであの本を買おうとしてたんですね」

「はい。今日この近くでアイドルのオーディションをするので、少しでも参考にしようと思ひまして」

そう言えば、確か姉貴が言ってたな。

そのせいで俺はこうやって外でブラブラすることになったんだっけ。まあ、オーディションの打ち合わせのおかげで桜内さんに会えたんだからいいか。

「へえ、そのオーディション受かればいいですね」

何人受けるかも、何人受かるかも分かんないけど、桜内さんなら受かるだろ。

「そうなればいいんですけど……噂によると倍率50倍以上らしいんです。受かる人数も7人だけです。私自信全然なくて……」

「うわあ、7人の50倍つて、350人も受けるんですか？」

「はい。そうなると思ひ……」

「いや、それどころじゃありませんね」

「マスター!？」

またしてもいきなり現れたマスターに俺も桜内さんも同時に驚く。ホントに突然現れる人だな、おい。

「そのオーディション、当日参加OKだったはずですよ。当日参加も含めると下手すれば100倍になる可能性もあるかと」

「……………マジですか？」

おいおい、それだと一体何人受けることになるんだ？

大体そんなに大人数のオーディションってどこでやるんだよ。

この小さな町にそんな大がかりなことできる場所なんてあったか？

こんなことだつたら姉貴に詳細聞いておけば良かったな。

「これはただの噂でしかありませんが、可愛いだけでは駄目らしいですよ」

「どういう事ですか？」

「もちろん容姿端麗であることも条件ですが、なんでも今回はアイドルの売り出し方が普通ではないらしくてですね。普通では考えられない試験をやるんだとか。まあ、どんな内容は知りませんがね」

「そうなんですか……」

桜内さんは『はあ』と大きく溜息を吐く。

それはそうだろう、ただでさえ高い競争率なのに、それが更に高くなるんだもんなあ。

「まあ、とにかく受けないことには受かりませんからね。お客さんもお綺麗ですし、頑張ってみてはどうですか？」

「そうですよ、桜内さんなら絶対受かりますって」

いくら競争率が高くて試験が普通じゃなくても、やっぱり可愛い人を合格させるはずだ。

桜内さんレベルの人が7人以上いるなんて思えないから、普通に考えれば問題ないだろう。

「私も芹沢さんみたいに可愛ければ自信持てるんですけど……私、可愛くありませんから……」

「そんなことないですよ！桜内さんは可愛いですって！」

思わず大声で言ってしまったって、周りの視線を集めてしまう。

しかも、今気付いたけど、俺女の子になんて事言ってたんだよ。

これじゃあまるで桜内さんに告白してるみたいじゃなか。

桜内さんも顔を真っ赤にして俯いちゃってるし。

桜内さんがあまりにも自信を持ってないからつい言っちゃったけど、これってやばくない？

「あ、あの……せ、芹沢さん？お、お世辞は嬉しいんですけど……」

……その……」

「いや、これは別にお世辞じゃなくて……」

本心なんだけど、これを言ったらまた可笑しなことになりそうだな。何かいい言葉はないかと考えていると、マスターが助け船を出してくれた。

「お客さん、そろそろオーディションの締め切りが終わりますが、行かなくてもよろしいんですか？」

「……………え？」

「時計はあちらです」

マスターが指差した方向を見ると、時計は12時半を示している。

「オーディションの受付終了は1時でしたね、確か」

なるほど、受付終了が1時ってことは、後30分か。

……………これって、やばいんじゃない？

オーディションをどこでやるかは知らないけど、場所によっては30分じゃ行けないからな。

「マスター、オーディションってどこでやるの？」

「確か、海でやるって聞きました」

「マジで？」

「マジで」

それじゃあもう間に合わないじゃん。

ここから海まで歩いて行ったら1時間くらいかかるから無理。

タクシー呼ぶにも時間がかかるし、電車は海の近くで止まらない。

やばい、どうしよう？

「芹沢さん、どうしましょう？このままでは間にあいませんよね？」

「どうしましょうって言われまして……………」

情けない事にどうしようもないんだよな。

今からすぐに車が出せばいいけど、そんなに都良くは行かない……………。

「車、出しましょうか？」

いと思っていたんだけど、このマスター今何て言った？

「あ、あの、もう1度言ってくれませんか？」

おずおずと桜内さんが聞く。

「ですから、お送りしましょうかと言ったんです。このままでは間にあわないでしょう?」

「それはそうですけど、いいんですか?」

「問題ありません。で、どうします?」

「どうしましょう? 芹沢さん」

「いや、俺に聞かれなくても……」

オーディション受けるの俺じゃねえし。

聞かれても答えようがないんだよな。

「あ、そうですね。すみませんでした」

桜内さんはそう言うのとペコリを頭を下げてくる。

「そんなことはいいので、どうするか決めた方がいいですよ」

「は、はい。……えっと、それじゃあ、お願いしてもよろしいですか?」

「そうですね。では、車の準備をしてきますね」

マスターはにやりと笑うと店の外に歩いていく。

どうやら、ホントに送ってくれるみたいだ。

初対面なのに、どれだけ親切な人なんだよ。

「あの、芹沢さんにも付いてきてもらっていいですか? 1人では不安なので」

「別にいいですよ、それじゃあ行きましょうか」

そう言うと、俺は桜内さんの手を引っ張って歩き出した。

今思えば、この軽率な返事が後悔を産むことになるんだよな。

受けるの？オーディション（前書き）

サブタイトル考えるのって難しいですね。

受けるの？オーディション

「着きましたよ」

「あ、ありがとうございます……………」

俺と桜内さんは満身創痍になりながらもマスターにお礼を言い、車から降りる。

車に乗ってこんなに疲れたのって初めてじゃないだろうか？

そりゃマスターも気を利かせてくれて急いだんだろうけどさ、いくらなんでも運転荒すぎるだろ。

隣で桜内さんは失神寸前になってるし、俺だって怖くて目を開けていられなかったんだよな。

速度メーターは見てないけど、多分100キロは出てたと思う。

もしそこまで出てなかったとしても、警察に見つかったら確実に捕まる速度だったのは間違いない。

まあ、何にせよ1時には間にあったし、事故にも遭わなかったから結果オーライなんだけど、もう2度とマスターの車には乗りたくないな。

「大丈夫ですか？桜内さん」

「は、はい。まだちょっと足がふらつきますけど」

……………それって大丈夫じゃ無いじゃん。

1人で立てないみたいだから手を差しだす。

「あ、ありがとうございます」

桜内さんは俺の手を掴むと、何とか立ちあがった。

足はまだ明らかに震えていて、手を離したら一瞬で崩れ落ちるだろう。

「では、お客さん。幸運を祈って店で中継を待っていますよ」

マスターはダンディな声で言うと、サングラスをキラリと光らせてから車で颯爽と去って行った。

多分、サングラスの奥ではウインクとかしてたんだろうな。

俺と桜内さんは車が見えなくなるまで茫然と見送っていた。

「つと、こんなことしてる場合じゃない。早く受付に行きましょう」
「あ、そうですね」

幸いマスターのおかげで時間に少し余裕は出来たがそれも数分。
俺達は急いで受付に向かった。

受付は分かり安く大きな看板があるのですぐに見つかる。
どうやらまだ受付は終了していないようだ。

「す、すみません。う、受付ってまだ大丈夫ですか？」
息を切らしながら桜内さんが聞く。

「あつ、君たち参加希望者！？」
タオルを海賊巻きにした男性はこっちに気付くと、ハイテンション

で聞き返してくる。

「いや、俺はちが……」

「いやあ、ぎりぎりだよ。後1分で受付終了するところだったじゃないか。さ、2人とも付いて来て」

「きゃっ！」

「うわっ!？」

男性は人の話しも聞かずに俺達の腕を引っ張って走り出す。
さっき『付いて来て』って言ったじゃんか！

どうして腕を引っ張る必要があるんだよ。

「ちょ、ま……」

『まってください』って言いたいんだけど、すごい勢いで走るもんだからなかなか言えない。

結局何も言えないまま待機室に着いてしまい、数字の書かれたプレートを渡された。

「それ、無くさないようにしてね。じゃあ、係の人呼んでくるから少しここで待ってて」

そう言くと男性は鼻歌を歌いながら去って行ってしまふ。

少しでもいいから人の話し聞いてほしかったな。

「芹沢さん、どうします？女の子に間違われてしまいましたけど」

「そうですね。別の人が来たら事情を話しますよ」

いくらなんでも連続で人の話を聞かない人が来る事も無いだろう。もし男だと信じてもらえなくても、最悪の場合ズボン脱げば一発だからな。

心配は無いだろうと思ってたんだけどさ。

まさか、よりにもよってこの人が来るとは思わないじゃない？

「……………」

「……………」

「姉貴、どうしてここにいるの？」

俺の目の前にいるのは姉貴こと芹沢里奈。

桜内さんには何かしら理由を付けて席を外してもらっていた。

「それは私のセリフだと思うんだけど、違ったかしら？」

「いえ、あなた様の仰る通りでございます」

そりやまあね、姉貴が勤めてる事務所のアイドルオーディションだもん。

姉貴がいるのが普通で、俺がいるのが可笑しいんだよな。

分かってる。

分かっているけどさ、元はと言えばそっちのミスじゃない？

俺の性別も確認しないでここまで連れてきちゃってさ。

そりや何も言わなかった俺も悪いっちゃ悪いけど、9対1くらいの割合であっちが悪いと思うよ、俺は。

「あんたがアイドルになりたいっていう気持ちはよく分かったわ。そりやその美貌ですもの。生かしたいって考えるのが普通よね。だけど、普通は姉が勤めてる事務所のオーディション受けるかしら？少なくとも私は受けないわね」

「別にアイドルになりたくて来たんじゃないし」

「じゃあ何でここに来たのよ？」

「それは……………」

俺はどうしてこうなったのかを掻い摘んで説明する。

「……………ふーん、じゃあ、あんたはその娘の付き添いで来たってワ

ケね？」

「そう、分かったら早く俺の参加取り消してくれよ」

テレビで中継もされるらしいし、こんなのに出てもし知り合いに見られたりしたらもうやってられないしな。

こう考えたらここで姉貴に会えたのは幸運だったかもしれない。

「えーとね、それ、無理だわ」

前言撤回。

ナンノヤクニモタナイジャンカ。

「何で無理なんだよ！？」

「だって、あんた連れてきた人鈴木さんって言うんだけど、あの人もちゃくちゃでね。あんたが男だって知ったら余計におもしろがつて絶対辞退させてくれないわ。それどころか、オーディション前から合格出しちゃう可能性もあるわね」

「マジですか？」

「ええ、大マジ。とにかく普通にオーディション受けて落ちるしかないわね。まあ、追い打ちかける様で悪いけどさ、あの人今『すごい美人さん2人キター！！』ってはいでるから、あんたが合格する可能性が高いってのが現状なんだけど、そこは自分で何とかしなさい。一応私も努力するけど、あの人より権力下だからほとんど何もできないわ。じゃあ、私の言えることはそれだけだから」

姉貴はそう言くと、俺の肩をポンと叩いてからすたすたと歩いて行く。

「こりゃ、ヤバい事になったな」

俺はそう呟くだけで精いっぱいだった。

受けるの？オーディション（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。評価や感想も待っています。

奇妙な試作品

「……………ふう、どうしよう……………」

俺は紙袋とにらめっこしながら呟いた。

多分、はたから見たらすんごい変人に見えるだろうな。

それは自分でも分かってるんだけど、どうしてもこう言わずにはいられないんだ。

どうしてこんなことになってるかって？

まあ、普通は想像もつかないだろう。

俺が悩んでいるのはこの紙袋の中身のせいだ。

この紙袋、『一応着替えなさい』とか言われて姉貴から渡された物なんだけど、とんでもない物が入っていた。

まず1つ目はふりふりのいっぱい付いた青色のワンピース。

これは100歩譲ってまだ分かる。

そりゃあアイドルオーディションの衣装だもん。

形だけとはいえ一応ちゃんとした物着なきやいけないからな。

んで、2つ目は指輪やネックレスとかアクセサリー類。

これもまあ、特に問題は無い。

問題なのは3つ目だ。

なんか嚴重に包装されてて、『何だろう？』って思ってたんだよ。

箱を開けて、紙を取って、エアクッションを取ったらさ、何が入ってたと思う？

おっばいだよ、おっばい。

本物は見たことないけど、多分これ本物と遜色無いんじゃない？

弾力なんかもう人肌とほとんど一緒で、今の技術ってこんなにも進歩したもんだと感心したさ。

一緒に入ってた紙には何やら色々書いてあって、とりあえずこれが試作品で、名前は『エアバスト』って言うのが分かった。

他には時速80キロで走る車から手を出した時と同じ感触とか書いて

てあるけど、それはどうでもいい。

付け方は専用の接着剤を塗って張るだけらしいんだけど、男としてこれを付けるのはどうなのよ？

これ付けたらもう俺が俺じゃ無くなる気がするんだが、気のせいかな？

「あ、あの、芹沢さん、さっきから難しい顔してどうしたんですか？」

「えっ？俺そんな顔してました？」

しまった、あまりにも中身にショックを受けすぎて周りのことを気にしていなかった。

慌てて近くにある鏡で顔を確認すると、ふむ、確かにいつもの顔じゃないな。

「すみません、ちょっと、これを付けるかどうかで悩んでて」

俺はそう言つと、エアバストを桜内さんに渡す。

桜内さんにはもう全部話してあるから問題ないだろう。

桜内さんは初め驚いた顔でそれを見つめていたが、少しすると意を決した様に手に取った。

押したり摘まんだりして色々興味深そうに弄りだす。

男の俺には分からないけど、やっぱり女子はこういうのに興味があるんだろうか？

俺は胸の大きさは気にしないけど、学校では大きい胸が好きな奴も多いからな。

女子はそんなことも気にしなきゃいけないんだから、ホント男で良かったと思うよ。

「あの、これ、何なんですか？それと、どうやって手に入れたんですか？」

「えっと、とりあえず『エアバスト』って言うらしいですよ。まだ試作品らしいですけどね。姉が持ってきたので、詳細はよく分かりません」

「そつなんですか……………残念です……………」

「ん？何か言いました？」

最後の方小さくてよく聞こえなかったな。

「ふえ？あ、いえ、何でもないです……………」

「……………」

何て言ったか気になるけど、本人が言いたくないなら仕方ないか。それよりも、今はこれを付けるか付けないかな。

俺的には付けたくないけど、付けないで男だつてばれても困るし、難しいところだ。

「それで、どうした方がいいと思います？」

「そうですね」

桜井さんは唇に人差し指を当て、可愛らしく考える。

この動作って不細工がやると気持ち悪いけど、やっぱり可愛い子がやると様になるな。

…………… どうでもいいか、そんなこと。

「一応付けておいた方がいいんじゃないですか？ばれてしまつては元も子もないですから」

「そうですか…………… 分かりました。じゃあ、付けます」

どうせいつも女物の服を着てるんだ。

これくらい気合いで何とかしてやる。

俺はそう決めると、更衣室に入った。

奇妙な試作品（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。感想や評価も待っています。

審査の内容

「……………これ、ホントに俺かよ……………」

着替え終わり、鏡で自分の姿を見た瞬間、俺はそんなことを呟いていた。

ワンピースを着てエアバストを付けただけで、こんなにも人の印象って変わるんだな。

まあ、これなら知り合いに見られてもばれないだろうし、万事OKなんだけど、なんでだろう？

男として終わった気がする。

「あの、芹沢さん。着替え終わりましたか？」

1人で落ち込んでいると、カーテンの向こうから桜内さんが声をかけてくる。

「すみません。今出ますね」

俺は待たせてしまったことを謝り、更衣室から出る。

桜内さんも俺が着替えている間に着替えたらしく、さっきとは服が変わっていた。

白を基調にしたもこもこの服で、どことなく羊を連想してしまう可愛らしい服だ。

「その服似合ってますね」

「そうですか？ 芹沢さんも、すごく似合ってますよ」

「あ、あはは、そう言ってもらえると嬉しいけど、ちょっと複雑……」

そりや似合っていないってズバツと言われるよりはいいのかもしれないけど、これはこれで辛い。

世の中のオカマに失礼だけど、女装の何が楽しいんだ？

俺には全く分からない。

しばらく話していると、扉が開き眼鏡をかけた中年のおっさんが入ってきた。

「今から1次審査を行いますので、会場に移動してください。審査の内容もその時に発表します」

おっさんはそれだけ言うと、扉を開けたまま出ていく。

待機室にいる出場者達はぞろぞろと移動を始めた。

「審査の内容って何なんでしょう？」

「分かりませんが、マスターの情報が正しければ普通じゃないでしょうね」

『正しければ』と言いはしたが、多分マスターの情報は正しい。

なぜなら、さっきセットを少し見たが、明らかに可笑しな物がいくつもあった。

あれを見る限りだと、審査が外見だけで決まるとは考えられない。

落ちるのが目的の俺にとっては好都合だが、桜内さんにとっては厳しいだろう。

「とにかく、覚悟を決めるしかありませんね」

「私、頑張ります」

桜内さんは胸の前で拳をぎゅっと握り、気合いは十分みたいだ。

「じゃあ、行きましようか」

「はい」

俺達は待機室を出て、会場に向かった。

『では、第1次オーディションのドッジボールを始めます！』

元気な声で司会者らしき若い女性が宣言する。

今、何て言った？

なんで、アイドルのオーディションでドッジボールをやらなくちゃいけないんだ？

「……………ドッジボール……………」

隣で桜内さんが茫然と呟く。

桜内さんだけじゃない。

周りの参加者達もざわついている。

『皆さん困った顔をしていますねえ。　かわいいそうだから説明してあげ

ましょう」

司会者はそう言うと、ポケットから白い紙を出す。

説明してあげましょって言ったのに、話す内容覚えてないのかよ。『えっと、1次審査の内容はさっき言った通りドッジボールです。

10人1組でチームを作り、勝ったチームの全員が2次審査に行くことができます。負ければ当然全員アウトなので、チームワークが大切ですよお。ルールは基本普通のドッジボールで、首から上に当たってもセーフです。チームはクジで決めてありますので、後に発表します。とりあえずこの1次審査で1500人の出場者が750人になっちゃいますので、運動苦手の人は得意な人と組めるように祈っててください。例えば、その背の高いワンピースの人と組めればラッキーかもしれませんね』

司会者の人は俺を指差しながら言う。

それにつられて皆が俺を見るが、それって大きな間違いなんだよな。だって、俺ワザと当たるからなんの役にも立たないし。

『それじゃあチームの発表いくよお！まず1チーム目は……………』

司会者が次々と出場者の番号を呼んでいく。

俺と桜内さんの番号はなかなか呼ばれず、時間だけが過ぎていく。

『126チーム目は、1499番、1500番……………』

いい加減聞くのがめんどくさくなってきた頃。

ようやく俺の番号が呼ばれた。

俺の番号は1499番だ。

「あ、やつと呼ばれた」

「私もです」

「……………え？」

俺と桜内さんの声が重なった。

審査の内容（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。評価や感想も待っています。

決断（前書き）

今回ちょっと短いです。

決断

「あんだ、何で1次審査勝っちゃったの？」

俺は今、姉貴に説教されていた。

どうして怒られてるかって？

そんなの簡単、さっき姉貴が言ったじゃないか。

1次審査勝っちゃったんだよ、ちくしょう。

しかも誰から見ても俺の大活躍でな。

だって、仕方ないじゃん？

桜内さんと同じチームになったのにワザと負ける訳にはいかないじゃないか。

「これにはさ、色々深い事情があつて」

「気変わりしたとでも言うの？あんだがアイドルになりたいってなら別にいいんだけど、父さんや母さんには何て言うつもりなのよ？」

「いや、俺は別にアイドルになりたい訳じゃなくて」

俺はどうしてドッジボールを頑張ったのか説明する。

「ふーん、じゃあ、あんだその桜内って娘のために頑張ったんだ？」

「まあ……そういう事かな」

「それって、ヤバいわよ」

「なぜ？」

「だって、最終審査まではずっと同じチームでやるんだもの」

「……………マジで？」

「ええ、マジで」

姉貴がきっぱりと言った瞬間、俺はその場で固まった。

だって、それってやばいじゃん？

桜内さんに協力しようと思うと、最終審査まで行かなくちゃいけない訳だ。

どう考えても俺の精神が持たねえよ。

もともと1回戦で負ける気だったからまだ耐えれたけど、長時間女

装なんて耐えられる気がしない。

そりゃ知り合いに見られてもばれないとは思うけど、実は俺、女装にトラウマがあるんだ。

思い出すのも嫌だから、どんなのかは聞かないでくれ。

とにかく、俺はここでどちらか選択しなけりゃいけない訳だ。

自分の為に桜内さんを犠牲にするか、桜内さんのために自分を犠牲にするか。

ここで漫画の主人公とかだったら迷わず後者を選択するんだろうけど、あいにく俺にはそんなの無理だ。

いやさ、考えても見ろよ。

自分が俺と同じ状況だとして、こんなの耐えられるか？

当事者として言うておくが、絶対無理だぞ。

「そうそう、これだけ言うておくけど、男であるためには男を捨てなくちゃいけない。昔父さんが言うてたわ。私の言いたい事はそれだけ。後は自分で考えなさいね」

姉貴は意味ありげにそう言うのと、ひらひらと手を振ってどっかに行ってしまった。

1人になり、もう1度よく考えてみる。

『男であるためには男を捨てなくちゃいけない』

この言葉、丁度今の俺に当てはまる。

男としてのプライドを捨てずに非紳士的行為をするか、男としてのプライドを捨てて紳士的行為をするか。

どっちを選べばいいかは分かっている。

「ここで逃げるのは男じゃねえよな」

どうせ外見で男になるのは無理なんだ。

だったらせめて内面だけでも男でいてやる。

絶対最終審査まで行ってやろうじゃないか。

最終審査まで行って、そこで落ちればいいんだ。

桜内さんと出会っちゃったのは不運だったかもしれない。

彼女と出会わなければこんな事にならなかったんだから。

でも、出会っちまったもんはしょうがない。
最後まで力の限り協力してやろう。

決断（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。

結果発表（前書き）

今回結構長いです。

結果発表

決断した俺はがむしやりに頑張った。

2次審査の持久走りレーも最下位から逆転して3次審査に進み、3次審査の鉄棒ぶら下がり耐久勝負も5人分くらいの時間耐えて4次審査に進んだ。

5次審査も6次審査も大逆転で勝利し、最終審査。チーム戦は終わり、ここからは個人戦だ。

「あの、芹沢さん、大丈夫ですか？」

最終審査の準備が整うまでの休憩時間。

待機室で椅子に座ってぐったりしてる俺に、桜内さんが声をかけてきた。

「めっちゃくちゃつらいです」

俺は今の気持ちを包み隠さず答える。

もうホント疲れた。

足はがくがく震えるし、腕の血管は切れそうになるし。

正直言っと早く帰りたい。

「それなら、どうしてそんなに頑張るんですか？」

「いや、どうしてって言われましても……………」

特に理由なんて無いんだよな。

けど、まあ、強いて言うのなら。

「桜内さんのためですかね」

「え！？」

一瞬にして顔を真っ赤にする桜内さん。

なんか『ボンッ』という効果音が付きそうだな。

「え、えーと、わ、わた、わたし、えっと、その……………」

桜内さんは顔を真っ赤にしたままわたたと手を振って、意味の分からないことを言っている。

この反応を見て思ったんだけど、俺ってさっきとんでもない事言っ

た？

思い返してみれば、さっきのってほとんど告白だよな。さっきまでは何ともなかったのに、そう思った瞬間恥ずかしくなってきた。

多分、俺の顔も桜内さんみたいに赤くなってるんだろう。首から上の体温が上がっているのが自分でもよく分かる。

「今のはそういう意味で言っただんじゃなくて……」

じゃあどういう意味で言っただらうね？

自分で言っておいて分かんないや。

「今のはナシ！ ナシでお願いします！」

いやあ、情けないね、俺。

もう男らしさの欠片も無いじゃないか。

いつそのことモロツコ行つて肉体改造して来ようかな……。

「分かりました！ ナシですね」

「ナシです！ 忘れちゃってください」

ホント、なんであんなこと言っちゃったんだろ。

やっぱ女装のせいで可笑しくなってるのかなあ……。

ちよつとしたごたごたもあつた休憩時間が終わり、終に最終審査が始まる。

明るかった空はもう暗くなっていて、多くの照明が使われていた。

さっきまでは全然気にならなかったけど、この会場って意外とでかい。

東京ドームとまではいかないが、3分の2くらいはありそうだ。

観客席はこんな時間になったにも関わらず満席で、多くのカメラマンがカメラを回していた。

そう言えばテレビ中継されていたんだっけ。

まあ、俺には関係ない話だな。

『さて！ 長かった戦いも最後になります！ 1500人いた参加者はなんと30人にまで減ってしまいました。この中から選ばれるのは

7人だけ。泣いても笑っても7人だけです』

長い間話し続けているのに相変わらずハイテンションの司会者が言う。

『最後の審査内容は自己紹介と1分間のアピールです。1分間と言う短い時間でどれだけアピールできるか、これが勝負の分かれ目となるでしょう。では！トップバッター108番の方、どうぞ！』

「はい！」

元気な返事と共に、108と書かれたプレートを付けた娘がステージに行く。

俺達には事前に審査内容が知らされていて、どんなことを話すかは考えてある。

ちなみに、いままで名前は伏せてあったが、今回は名前を言うらしい。

俺は本名言つと色々まずいから、偽名を姉貴から授かってるんだけど、その名前が『前田松^{まえだまつ}』ってのはどうかと思う。

あの有名な戦国武将の前田利家^{としいえ}の奥さんの名前なんだ。

お袋に似て姉貴も歴史オタクなのを忘れてたよ。

まあ、そんなことは置いといて。

俺の出番は最後だ。

こんな大掛かりなオーディションの大トリが俺ってのはどうかと思うんだけど、平等なクジの結果じゃしょうがない。

ちなみに桜内さんは2番目だ。

さつきからガチガチに緊張してて、大丈夫か心配になってくる。

「桜内さん、リラックスリラックス」

肩に手を置いて話しかける。

「ひゃあっ！」

少しでも緊張がほぐれてくれればと思ったけど、逆効果かな？

「ただ、ただ、大丈夫です。き、緊張なんか、して、ません」

いや、明らかにしてるでしょ。

これで緊張してないって言うのなら、緊張してる時ってどんなのよ？

「大丈夫です。桜内さんなら余裕ですって」

言っちゃ悪いけど、今までの意味分からん審査のせいで、20人位残念なお顔の人がいまして。

普通に考えると確率10分の7な訳なんだ。

俺が抜ける事を考えると9分の7で、落ちる確率のが少ないんだよな。

『お疲れさまでした！続きまして、1500番の方、どうぞ！』

108番の人が終わって、桜内さんの番号が呼ばれる。

「ひゃい！」

……………おい、いきなり噛んだぞ。

桜内さんはカクカクとロボットの様に歩いていく。

何かやけに不自然だと思ったら、右手と右足同時に出てるんだな。

ここで日本人本来の歩き方をするとは、緊張してるのかリラックスしてるのか……………緊張だな、絶対。

不安でいっぱいになりながら見ていると、桜内さんはマイクの前にたどり着きそうなところで。

「きゃあ！」

転んだよ。

何も無いところで。

それはもう見事に。

顔面から。

桜内さんはおでこを強打したらしく、おでこを擦ってから立ちあがる。

「わ、私は、桜内愛梨です。えっと、趣味は、お菓子を食べたり、作ったりすることで、えっと……………」

話す内容が思い出せないらしく、桜内さんはその後『えっと、えっと』を繰り返す。

どこからどう見ても失敗なんだけど、ある意味これで良かったのかもしれない。

だって、観客や審査員の反応は抜群なんだ。

『ドジっ子かわい〜!』とか『愛梨ちゃんサイコー!』とか、なんかもう、すごいよ。

「と、とにかく、よろしくお願いします!イタッ!」

結局桜内さんが話す内容を思い出す事はなく、時間が切れて強引に締めた。

しかも、お辞儀をした時にマイクに頭をぶつけてまたおでこを押さえている。

もうドジっ子もここまで来ると神だな。

「あう〜、ダメでした」

桜内さんはおでこを擦りながら半泣きになって戻ってくる。

完全に意気消沈していて、『ず〜ん』という形容がぴったりだ。

「多分、大丈夫ですって。後は信じて待ちましょう」

「……………そうですね」

桜内さんは暗く言うのと、椅子に座ってガクツとうなだれる。

他の参加者たちは桜内さんの様子を見てガツポーズしてたりするけど、最低だな。

普通は、慰めるとか、心の中でガツポーズとかじゃないのか?

誰が選ばれても俺には関係ないけど、そんな人たちには選ばれてほしくないな。

最終審査は順調に進んでいって、終に俺の番。

ステージ裏にいる他の参加者たちは泣いたり祈ったりしてる。

「じゃあ、行ってきます」

桜内さんに声をかけてステージへと歩いていく。

ステージの上は思ったよりも眩しくて、思わず目がくらんだ。少し顔をしかめながら歩いき、マイクの前に立つ。

1度お辞儀をしてから、俺は自己紹介を始めた。

『皆さん今晚は、エントリーナンバー1499番、前田松です』

そう言ってもう1度お辞儀をする。

「清楚系キター!」

「いいよ！いいよ！可愛いよ！」

拍手と共にそんな言葉も飛んで来て、背中がぞくつとする。

いやあ、男に可愛いとか言われるのって慣れてるつもりだったけど、やっぱり気持ち悪いわ。

とくかくさっさと言う事言って終わらせよう。

ワザと落ちる言葉は姉貴と一緒に考えた。

その言葉とは…………

「実は私、握力60kgもあるんです」

これだ。

だってほら、考えてみろって。

付き合ってる彼女がいきなり『実は私、握力60kgもあるの』なんて言ってきたらさ、幻滅するんじゃない？

少なくとも俺は速攻で別れるね。

それに、ほら、見てみる。

思い通り観客や審査員たちはポカン顔で固まっている。

さて、ここでとどめを刺しておくか。

「すみません、用意しておいてもらったリンゴ、もらえませんか？」

ポカン顔で固まっている司会者に言う。

「え？あ、これですね？」

「はい」

「ど、どうぞ」

司会者は戸惑いながらも俺にリンゴを渡してくれた。

「では、見ててください」

俺はリンゴを片手で持つと、思いつきり握る。

すぐにリンゴから果汁がにじみ出てきて、数秒後、リンゴは辺りに果汁を撒き散らして砕けた。

「では、皆さん、よろしくお願いしますね」

俺はぺこりとお辞儀をすると、勝手に退場して行った。

ステージ裏に戻ると、みんな何とも言えない顔をしていた。

あからさまに『バカじゃないの?』みたいな視線を向けてくる人とか、『何こいつ?』みたいな視線を向けてくる人とか色々だ。

ライバルが1人減ったんだから喜べばいいのに。

よく分からない人たちだ。

「芹沢さん、力強いんですね」

椅子に座ると、桜内さんが小声で話しかけてくる。

「一応鍛えてますからね。あれくらいは余裕ですよ」

俺も男のはしくれた。

筋骨隆々の肉体に憧れたりもする。

だけど、一向に腕とか足とか太くならないんだよな。

一応筋肉は付いてるみたいなんだけど、ホント不思議なもんだ。

その後は結果発表までしばらく雑談して、ようやく結果発表の時間になった。

30人全員ステージに上がられて、照明は全て消された。

『それでは!お待ちかねの結果発表です!』

ハイテンションで司会者が言う。

『では!まずは1人目は……この方だ!』

ダララララララ、という太鼓の音と共にスポットライトがあつちこつちに行ったり来たりする。

10秒くらいこれが続いて、『ダン!』という音を最後にスポットライトが止まった。

「……………は?」

照らされているのは……………ナント俺だった。

結果発表（後書き）

誤字脱字があればご指摘お願いします。感想や評価も待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136p/>

アイドルは男の娘！？

2011年2月3日11時31分発行